

# 研究指導に用いる言語は英語か日本語か

福島 E. 文彦

東京工業大学大学院理工学研究科機械宇宙システム専攻

152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1

E-mail: fukusima@mes.titech.ac.jp

## English or Japanese for Research Activities

FUKUSHIMA, Edwardo Fumihiko

*Dept. of Mechanical and Aerospace Engineering*

*Graduate School of Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology, 152-8552*

外国人留学生にとって日本語の学習は困難を極める。そのため、留学生に対してより効率的で効果的に日本語を教える教育方法が模索されている。一方、現在では英語のみで学位を修得できる国際大学院コースも開設されているが、未だに大多数の留学生は一般大学院コースに入学している。本稿では、このような背景も踏まえ、留学生に対する研究指導の言語に関する諸課題について考察する。初級程度の日本語力でも大学院講義の単位は取得でき、研究も遂行できる。その一方で、高度な日本語を学習したい留学生も少なくはなく、科学技術日本語の国際コミュニケーション科の開講はそれらの学生にとって有益である。それに加えて、異文化ショックを軽減させる教育が重要である。

キーワード： 国際大学院コース、外国人留学生、日本語教育、文化ショック

### 1. はじめに

筆者は東京工業大学の留学生として14年前に来日し、研究生、博士前後期課程を経て現在は同大学の教官として学生の指導等に当たっている。学生時代には未だ国際大学院コースが開設されていなかったため、授業は日本語で受講しなければならなかった。また、筆者自身が非英語圏の国の出身であったことと、当初からある程度日本語を話せたということから、研究室での討論や論文作成の言語として主に日本語を使ってきた。しかし、近年では外国人留学生はもとより、日本人学生の研究指導にも英語を使う機会が多くなってきている。本稿では筆者のこれまでの経験も踏まえ、大学院での研究活動における日本語と英語の使い分けの現状について述べ、それぞれのメリット、デメリットについて考察する。

結論から述べると、外国人留学生が円滑に大学院生活を送るためには純粋に英語のみでは不十分であるが、

高度な科学技術日本語能力を習得するのは必須ではないのではないかというのが筆者の個人的な意見である。

### 2. 留学生の英語力と日本語力

#### 2.1 地域別にみる留学生の英語力

まずは、研究分野によっても左右されるが、日本の大学に留学する英語圏の留学生はごく少数であり、大多数の外国人留学生にとって英語は母国語でないことに注意されたい。筆者が過去数年関わってきた留学生の例を表1に示すが、やはりそのような傾向がみられる。このような理由から、実際に流暢に英語が話せる留学生は割合と少ないのである。

さて、日本で留学生を受入れる際には英語力は予め審査されているため、留学生は基本的には英語の基礎はできている。ところが、来日してから集中的に日本語教育を受けた後は、相対的に日本語力が英語力を上回る場合がある。これには、(i) 元々絶対的な英語のレ

ベルが低い、または (ii) 日本語の習得速度が比較的速い、ことが理由として挙げられる。特に東南アジアの漢字圏出身の留学生は両ケースに当てはまる。一方、欧米諸国の留学生は日本語力が著しく上達したとしても、相対的にはやはり英会話の方が堪能である。

表 1 外国人留学生の英語力 (当研究室統計)

出身国	英語力	日本語力	
		発表・討論	論文執筆
アメリカ (1)	ネイティブ	△	×
カナダ (1)	ネイティブ	△	×
ブラジル (3)	○	△	△
イタリア (1)	○	△	×
フィンランド (1)	○	△	×
韓国 (1)	△	○	○
中国 (2)	△	○	○
タイ (2)	△	△	△

○良、 △可、 ×不可

## 2. 2 日本語力と大学院の単位取得の関係

例外はあるが、原則として留学生は研究生あるいは日本語研修生の身分で来日し、専門家によって実施される集中日本語教育を受けてから正規の大学院コースに入学する。大部分の留学生はこの期間に初級の日本語コースしか終了できないが、日本語で講義を聴講し無事に単位を取得するに至っている。このことから最低限の日本語の聴講力と読解力は養っていると推測しても良いかもしれない。しかしながら、留学生が日本語の説明や講義内容をどれだけ理解できているかというと、あまり理解できていないのが現状である。日本人学生にとっても、理解が難解な大学院講義内容を、日常会話程度の日本語の理解力しか備えていない留学生に理解してもらおうと期待すること自体がそもそも間違っているのかもしれない。

留学生の多くは講義の予習や復習を怠らず、また理解できなかった内容については他の学生や担当の先生に積極的に質問する。さらに、大学院の授業は出席数と最後に提出されるレポートによって採点されるケース

が多い。幸いにも殆どの授業担当者は留学生の片言の日本語、あるいは英語での質問等に対して丁寧に応じてくれる。また、未だ十分な日本語の文章力を習得していない留学生には英文のレポート提出も認めてくれる。最初の日本語教育無くしてはもちろん不可能だが、このような留学生の努力、日本人学生の協力、そして授業を担当する教官の配慮があって初めて、留学生は講義内容を全体的に理解でき、辛うじて単位を取得できていると言っても過言ではない。

## 2. 3 日本語教育を受けなくても良いコース

### (A) 国際大学院コース

国際大学院コースでは英語のみで修士と博士の学位を修得できる。本学でも 10 年前から開設されている。日本語教育のために時間を取られることはないの、直ぐに専門分野の勉学と研究に専念したい学生側にとっても、留学生を早く研究チームの一員に受け入れたい指導教官陣にとっても、合理的な制度であるといえる。しかしながら、(i) 10 月入学のコースしかない、(ii) 選択できる授業の種類や講義内容は一般コース程充実していない、(iii) 文部科学省の国費留学生枠が少ない、(iv) 募集人員数が少ない、という制約があるので今後の改善が期待される。

### (B) 博士後期課程 (ドクターコース)

既に修士号を持っている留学生の場合、単位取得のために大学院の講義を新たに受ける必要が無い。そのため、一般の大学院コースに入学した場合でも、指導教官が英語を用いて指導すれば高度な科学技術日本語の能力は必要ではない。

ただし、上記 (A) (B) いずれの場合でも、留学生は日本で長期に渡って生活することになるので、日常会話程度の日本語は習得することが好ましい。

## 3. 研究指導の共通言語としての英語の可能性

大方の外国人留学生は日常会話ができる程度の日本語力は備えているが、

- 研究に関する高度な議論
- 論文執筆や口頭発表

に関しては、英語を用いた方が効果的であると考えられる。ここで、研究室内における研究指導や、学会発

表等の研究活動全般において英語を共通言語として用いた場合のメリットやデメリットについて考察する。

(1) 英語をメインに用いても良いケース

- a. 外国人留学生を受入れる指導教官陣は英会話に堪能である。自らが外国での生活を経験した先生方が多く、文化の違いにも柔軟に対応できる。
- b. 留学生が流暢に英語を話せる場合、日本人学生が自分の英語力を試す機会でもあるので、自ら留学生に歩み寄って積極的に英語での会話を求め親睦を深める機会を作る。
- c. 研究室や大学は短期滞在の外国人客員研究員や客員教授を受け入れる体制が整っている。当然対応はすべて英語である。極端に言えば、留学生も最初に研究室に配属される時に日本語がまったくできなくても対応はできる。
- d. 一般大学院コースでも英文での修士論文や博士論文の作成が認められ、口頭発表も英語でかまわない。日本人学生が英文で執筆する例もある。
- e. 国内学会でも英文原稿の投稿が認められ、口頭発表や質疑応答でも英語の使用が認められている。留学生の場合、日本語の発表よりも英語の発表の方が聴講者には理解しやすい。また、日本人からの英語での質疑応答も少なくはないので、国内学会でも英語での活発な討論が実際に展開される。
- f. 学位取得のために学術論文を数件投稿しなければならないが、日本語論文である必要は無く、むしろ Citation Index 等の対象になっている外国論文誌に投稿する方が指導教官側からも期待されているのが現状である。
- g. 重要な研究成果は英語論文として公表されている。指導教官が英語論文を発表していなければ外国で著名にはなれなく留学生がその研究室に来る可能性は低い。
- h. 第 2.1 節で説明したように東南アジア、特に漢字圏出身の留学生の中には英語よりも日本語を得意とする学生が多い。この場合、指導に日本語を用いることも可能であるが、非英語圏の留学生も日本人同様、世界に通用する言語として英語を重要視する。そのため、彼ら自身も日々英語力の向

上に努めている。日本に来てから英語が上達する留学生は珍しくない。

- i. ネイティブスピーカーを受入れたいという願望は、指導教官陣と日本人学生に共通している。日本人学生は英語圏からの留学生を他の東南アジア地域の留学生よりも歓迎するようにも思えるが、実は英語が得意であれば出身地はあまり重要ではない。
- j. 英語を得意とする留学生は、国際学会等へ投稿する際に英文原稿を添削してくれるので教官や日本人学生から重宝される。また、口頭発表の練習相手にもなる。
- k. 研究室内の全体ゼミ等で留学生が自分の研究の進捗状況等を英語で発表して英語で討論することは、日本人学生にとっても良い英語の練習機会となる。
- l. 一般大学院コースでは学位申請用の論文要旨の言語は日本語しか認められていない。しかし、1枚程度の概要は留学生が頑張れば作成できるし、指導教官にも添削は大きな負担にならない。

(2) 日本語力が必要なケース

- m. ゼミや学会での日本語発表に対して、その場で自ら討論に参加するためには中級程度の日本語力が必要である。しかし、実際には日本語発表でも留学生からの英語での質問や討論も普通になってきている。
- n. 英文化されていない研究上必要な日本語の文献も少なくはない。この場合、研究室の仲間や教官の協力を得て内容の理解に努めるとよい。
- o. 大学院講義を受講するためにはある程度の日本語力を備えていなければならない。しかし、第 2.2 節で考察したように、実情として初級程度の日本語でも十分単位は取れている。

上記 (1) と (2) は、実は筆者が所属する研究室の留学生の実態に近い。このような方法でも、留学生は問題なく研究を遂行し、学会発表等も無事にこなしている。このことから、筆者は大学院での外国人留学生の研究指導は英語でも十分である、いや、むしろ英語

の方が効果的であると考えている。

#### 4. 日本における留学生教育はどうあるべきか

##### 4. 1 日本語教育

日本の大学院に入学する外国人留学生は最低でも2年、長い場合は6年以上日本に滞在する。そのため、日常会話レベルの日本語教育は当然必要である。

なお、大学院の研究を遂行するに当たっては英語で十分と述べたが、積極的に日本語を習得したい留学生も少なくはない。ところが、大学院入学後は専門分野の勉学と研究に忙しいので、日本語教育を受け続けることは困難である。こんな中、科学技術日本語を大学院の正規カリキュラムに導入して単位も与える授業<sup>1)</sup>の存在は大変有意義であり、今後はもっと多く開講されることを期待したい。

日本人は、留学生が間違った日本語の使い方をしていても、正しい使い方を指摘することは殆どない。場合によっては、数年誤った表現を使い続けることもある。日本語教室での指導はこの点でも重要である。

##### 4. 2 文化ショックの軽減

文化の違いから留学生同士、留学生と日本人学生、そして留学生と指導教官の関係に不信感や緊張感からストレスが発生することもある。お互いがそれぞれの文化を十分尊重していると思っけていても、至るところに落とし穴がある。

各大学に設けられている留学生センター等では、日本語教育の一環として日本の文化の紹介を授業に取り入れているが、文化の違いによるミスマッチを事前に

解消する役割をさらに期待する。たとえば、留学生の所属している研究室に向いて全体ゼミ等の時間に異文化講義を短時間でもするのは効果的かと思う。

#### 5. おわりに

本稿を執筆するに当たり、筆者自身も留学生時代に留学生センター等の先生や職員の方に色々ご迷惑をかけ、大変お世話になっていたことを改めて思い出した。また、研究生生活は英語で十分であるといいながら、自分の日本語力の未熟さと、日ごろの作文の大切なことを痛感した。

最後に、本稿では筆者の主観的な意見も多く述べたが、できるだけ事実に基づいて考察したつもりである。本誌読者に多少なりとも参考になれば幸いである。

#### 参考文献

- 1) 小長井誠：電気情報系教官による「科学技術日本語」の講義、専門日本語教育研究第2号、pp.10~13 (2000)

#### 著者紹介

福島 E. 文彦：東京工業大学大学院理工学研究科助手【経歴】1994年東京工業大学大学院博士後期課程単位取得の上退学、博士（工学）【専門】ロボット工学、電動機制御

#### 英文要旨

Learning the Japanese Language is a great challenge for most foreign students wishing to pursue an academic degree in Japan. However, in most cases, English can be used for discussions inside the Lab., writing academic papers and for presentations even in local national conferences. Nevertheless, Japanese courses for everyday life should be required for those staying longer than a semester in Japan. Furthermore, intermediate to advanced courses to teach Japanese technical reading and writing skills, would be expected to be offered as regular classes, so that foreign students could get credits when attending these classes.

Key words: international graduate courses, foreign students, Japanese Language